私の 2022 年

51 期　桑原 風人

51 期の桑原です。この季刊誌を書いたのは、2022 年 11 月末から 12 月頭にかけてです。私にとっては、約 3 年間の地方生活を終えて、ちょうど東京に戻ってきたタイミングでした。この先どこに向かって生きていくか、自分の中で定まっていることもあれば、迷っていることもあります。

季刊誌のタイトルは『私の 2022 年』にしました。取り組んできたことだけでなく、私の根底にある思いが伝わるように書いたつもりです。私にとっての『中央大学理工ボート部観』についても、最後の方に記しました。理工ボート部に関わる皆さんが、これを読んでどんな感情を抱くかはわかりませんが、少しでも良い影響を与えることができたら嬉しいです。

仕事のこと

[↑1 年 9 か月を過ごした北海道北広島市　市役所屋上テラスからの写真]

私はいま、建築生産設計という仕事をしております。‘設計’という言葉が付いていますが、私がしているのは設計ではなく、現場監督でもなく、その間を取り持つお仕事です。設計図をもとに、工事に必要な図面を作るという仕事をしています。

設計者が作成する設計図は建物の指針となりますが、それだけで建物を建てることはできません。それを細分化し、専門業者に仕事を振り分け、区分を明確にし、各社間の調整をとり、たくさんの図面を描き上げ、完成形をより具現化していく役割が大規模建築物を建て

る際には必要になります。その職種を建築生産設計と呼びます。

この仕事は、ある程度決められた枠組みの中で仕事をするので、自由度はあまりありません。私は柔軟性が求められるアウトプットに苦手意識があるので、苦手なことをやらなくて済む今の立場に非常に助けられています。

鉄筋屋さん、大工さん、建具屋さん、金物屋さん、家具屋さん、サイン屋さん、電気さん、空調さんなど、建築工事は多様な業種の人が関り合う必要があります。利害が対立する局面に何度もぶつかり、その調整をとっていく必要があります。生産設計者は図面だけ書ければ良いわけではなく、調整をとりながら協力会社さんの良いところを引き出していくスキルの方が、より重要だと感じています。

〇専門分野を変えることと、そのタイミングについて

私の同僚のほとんどは、大学で建築を学び、新卒から建築の仕事をしています。対して私は、大学で建築を学んでいないし、今の職種に就いたのは社会人 6 年目のときです。18 歳～27 歳の 10 年間で、積み上げてきた知識・経験が異なります。業務に直結する専門知識という観点で、私は完全に遅れをとっています。「周りの人と同じことをしていては絶対に勝てない」と自分に言い聞かせ、休日もなるべく勉強に時間を割くようにしていますが、悔しい思いをすることが多いです。私と似たような選択を検討している人は、マイナス面もよく理解し、最下部からスタートする自分を受け入れるべきだと思います。

私は物理学科出身ですが、自分にとってベストな場所だったのかがわかりません。4 年間中途半端に過ごしてしまったところもあり、勿体なかったという思いがあります。もし大学 2 年に戻れるなら、編入や転校といった転身について、どんな選択肢があるのかを調べてみたいです。

人生の軌道修正は、無くて済むなら無い方が良いと思います。学生の皆さんは、日々学んでいることに手応えを感じているのであれば、それを活かせる道に進んでいくのが鉄則です。長い時間をかけて積み上げた経験と知識は強いですから、その武器を大事にすべきだと思います。それと、これは業界によって異なるかもしれませんが、一途に勤続年数を重ねている人と、畑違いのところから飛び込んでくる人とでは、待遇の違いもあります。

自分の進んでいる道に手応えを感じられていない場合、変化を起こすのは早ければ早いほど良いと思います。年齢を重ねれば重ねるほど、残された時間は少なくなりますし、ハードルも上がっていきます。自分をよく疑って下さい。そして、ここぞという時は自分を信じて下さい。「こうした方が良いはずだ」と思う道があれば、大胆にいく勇気を大事にして欲しいです。

〇ボートが嫌になってしまったら

この軌道修正のお話は、サークル活動にも当てはまると思います。ボート競技は、動作としては1ストロークをゴールまで繰り返す単調なものなので、飽きてしまいやすい傾向があると思います。ある程度のスキルが身につくと、レベルアップにハードワークが必要となります。そうした条件の中で工夫を凝らし、自ら楽しみを見出せるかが鍵となりますが、性格的にも身体的にも向き不向きのあるスポーツだと思っています。自分に合っていないと思いながら4年間続けるのは辛いはずです。

向いていないと感じたときに、退部・休部という選択肢を使えるようにしておくと良いと思います。インカレで優勝するようなチームの中にも、目標を見失ったときに休部をして、またスイッチが入った時に復部をする人がいます。その方が、1つのことをしっかりやり切ることができて、いい結果に繋がると思います。59期の今野が、7月の東日本選手権2000mレースを目標に集中して取り組み、レース後はボートと離れて留学に旅立ちましたが、こういうのもすごく良いと思います。組織の喜ぶことだけに合わせてしまうと、自分のやりたいことができなくなってしまいますから。理工ボート部の学生のみなさんには、ボートを楽しみつつ、自分にとってベストな大学生活を模索して欲しいです。

ボランティア活動のこと

2022年、私は子どもの機会格差解消をビジョンに掲げる北海道のNPOで、学習支援を行うボランティア活動を始めました。月に2回ほど、札幌にある公共施設で対象者の子どもに学習のサポートをしていました。

この活動に参加したきっかけはいくつかあります。北海道で、職場とボート以外のコミュニティーが欲しいと思って始めたところが大きいのですが、それだけではありません。子どもに関わる仕事をしていた2020年の経験も、その1つです。

当時の私は、様々な家庭環境の子どもや親をサポートしなくてはならない立場にいました。しかし、私の力量不足もあり、効果的な支援をすることができませんでした。詳しい経験はここに書けないですが、その時に抱いた問題意識が、このボランティアを始めた動機の1つになっています。

いわゆる貧困状態に陥ってしまった家庭というのは、心の余裕を持つことが極めて難しいです。そのような窮地に陥ってしまうことに対して、本人が悪いとか、親が悪いとか、そういう意見が出やすいですが、当事者だけではどうにもできないことが沢山あると思います。私は実際に接して初めて、その状況の厳しさを少しだけ理解できました。

○エリクソンのライフサイクルモデルの紹介

精神分析家エリック・H・エリクソン(1902-1994)という人が提唱した『ライフサイクルモデル』という理論があります。エリクソンは、人間はどのような道筋をたどると、健康で幸福な人生が送れるのかを研究し、1 つのモデルとしてまとめました。

彼は、人間の精神の発達には 8 つの段階があり、それぞれの段階で乗り越えなければならない主題(サブジェクト・オブ・クライシス)があるとしました。それを乗り越えずに年齢を重ねると、いつか危機的な状況を迎えてしまうと主張しています。

この理論において、人間が初めに乗り越えなければならない主題は、「基本的信頼の獲得」です。人は、誰かから信頼してもらえていると実感することで、頑張ろうとする気力が初めて湧いてくる。その経験を経て、誰かを信頼することもできるようになる。子どものことを無条件に愛してあげることが、いちばん大切な精神の土台を作り上げると、エリクソンは主張しています。

子ども時代は誰もが人生一度きりで、やり直しができません。長い人生を生き抜いていく上での土台を、すべての人間が獲得できるように社会全体で目指していくことが、大事ではないかと私は思っています。

私がボランティアをした NPO 団体は、「すべての子どもが学びの機会に出会い、自己実現に向けて挑戦できる社会を目指す」というビジョンを掲げて、様々な支援活動をしていました。私はそのビジョンと活動に共感したので、そのメンバーに加わりたいと思いましたし、活動そのものを楽しむこともできました。

○自分のため、誰かのため

人間誰しも、他人の幸せより自分の幸せを欲するものだと思いますし、私も自分の幸せを最優先に生きている人間の 1 人です。ただ、自分だけが幸せになれれば良いとも思いません。自分のやりたいことをトコトンやってきた人は、次の世代を生きる人たちが幸せな人生を送れるようにという意識を持つべきだと思っております。

○義務のない立場で、サポート活動を楽しむ。

このボランティア活動の仕組みは、私が理工ボート部でやりたいことをすごく体現していました。私は参加できるときはしつつも、忙しいときは無理をせず欠席をしていました。団体職員から「細い繋がりで大丈夫」と言ってもらえていたので、安心して自分のペースで活動をすることができました。

理工ボート部において、現役支援をすることは OBOG の義務ではありません。だから皆さんには、義務感なく自分なりの形で関わって貰えたら嬉しいですし、思うような活動がで

きなくても負い目に思って欲しくありません。OBOG も含めて、関わるすべての人が純粋に活動を楽しめるチームこそ、私の目指す理工ボート部です。

審判の活動のこと

［↑北海道でお世話になった方々］

［↑茨戸川漕艇場］

2022 年、私は北海道で行われた 3 つの大会で審判をしました。マルチな関わりを意識してボートと向き合った 1 年で、大会運営側の活動もしてみました。

審判をやろうと思ったきっかけはいくつかあります。まず大きいのは、ボートに携わる人間として、もっと成長したいという気持ちです。私は、理工ボート部以外のボート関係者と関わる際に、自分のボートスキルに対して劣等感を感じてしまうことがあります。本気でボートをやってきた人なら知っていて当然ということを知らなかったりすると、どうしても自信が持てません。

自信が持てると他人に対して臆せずに接することができるので、チームにおいても好循環が生まれやすいと思います。だから私は、ボートについての知識と技術を高め、もっと自信を持って活動したいと常々思っています。

［↑2022 年 4 月 9 日　艇庫開き作業］

もうひとつ大きいのが、北海道のボート関係者から受けた影響です。２シーズンに渡り北海道ボート界に少し関わりましたが、東京ではできない貴重な経験をさせてもらったと思っております。

札幌圏のメイン水域である茨戸川漕艇場を例にすると、艇庫開きは 4 月中旬、納艇作業は 11 月上旬に行われます。冬は全面が凍ってワカサギ釣り場になる茨戸川で

は、毎年のようにブイの取り外しや、船台の引き上げを行わなければなりません。そのような過酷な条件下だからこそ、みなさんで協力し合い、自分たちの手でボートに打ち込める環境を作っていこうとする風土があると感じました。私はそこに好感を持っていたし、ボートに携わる人間として、ここから何かを得たいと思いました。

北海道の地方大会では、運営側の人数は 50 名ほどです。審判以外では、沈などの非常時に救助へ駆けつけるモーターボートチームや、救護のために控えている R.E.S.T チーム、配艇、記録、放送、総務、ボートホルダーなどの役割があります。朝は第 1 レースの 2 時間前くらいに集合をして、モーターボートの準備から各機器のテスト、レーススケジュールの読み合わせなどを行います。休みの日に朝早くから仕事する大変さはあるものの、様々な人と関わりながら一役を担える充実感はありました。

1 番の思い出は、網走で行われた少年の部の国体予選です。札幌―網走間は、東京―名古屋間くらいの距離があります。そのため、札幌近郊にいるメンバーは網走市内のホテルに宿泊をします。ホテルの手配は網走にいる審判の方がして下さり、私は道ボ会長の東さんと相部屋になりました。

[↑札幌-網走間の規格艇運搬のための作業]

私にとって敷居の高い方でしたが、この機会でいろいろなお話を聞くことができました。例えば、北海道ボート界は来年、網走でのインターハイ開催というミッションを抱えており、その準備に関する話を沢山してくれました。今まで自分が触れたことのない世界のことを知り、楽しく過ごすことができました。

[↑網走湖漕艇場]

〇仕事と家族とボート

運営側でボートに携わっている方々にも、自分の仕事があり、家族があります。加えて、ボートの事で責任も負っています。我慢が強いられる局面に何度もぶつかりながらも、活動を続けているという方が沢山いることを知りました。

強豪校の監督・コーチが、よく「家族を犠牲にしてやっている」という発言をされますが、負っている責任が大きいと、そうならざるを得ないようです。中島監督は監督業をずっと続けられていて凄いですが、無理をされていないか心配になることもあります。

〇ボートの共同体感覚

ボート競技は手軽にできるものではなく、様々な人と連携しなくてはならない競技性が

あります。整備されたコースがあって、使って良い艇やオールがなければ、ボートはできません。レースが開催されなければ、練習の成果を発揮する場もありません。自分たちのやりたいことができるか否かは、周りの人たちがどのくらい協力してくれるかで決まると言っても過言ではないと思います。

現役ボート部幹部メンバーには、ボートで関わる全ての人と、ひとつのチームを作っているという感覚を持つことを勧めます。そうすることで、誰とどういう関係を築きたいかが、見えてくると思います。

これからのこと

[↑2022 年理工系レガッタ]

[↑2022 年ミニオール贈呈式]

2022 年 12 月に、私は東京に戻ってきました。中島監督・岡本コーチと一緒に、また現役の活動に関わることができると嬉しいです。とは言っても、私はまだ 60 期、61 期の皆さんと、あまりコミュニケーションをとれていません。まずは大きなことをしようとせず、練習に参加する中で、みなさんの人となりを感じるところから始めてみようと思います。

納会の時に主務の葵ちゃんが、「今のボート部が好きだから、今のままを続けたい。」ということを話していて、それが凄く印象的でした。玲キャプテンが「ボートが好き」と公言していたのも響いています。現役部員がノビノビ活動できていることを思うと、嬉しい気持ちになりました。

その一方で、新しい何かをやりたいと思ったときは、失敗を恐れずにチャレンジして欲しいという気持ちもあります。監督コーチ・OBOG 幹事会は、何かあった時に学生を守ってあげることを目標としております。失敗をすれば誰かに迷惑をかけてしまいますが、それも込みで様々な経験をして欲しいと思っている大人がいることを、頭の片隅に入れてみて下さい。

OBOG 幹事長としては、もっといろんな人の良いところを引き出せるようになりたいです。2022 年は、自分の考えに固執してしまって、周りの人のやりたいことを実現させると

いう意識を欠いた気がしています。2023 年はお食事する機会が増えると思うので、そういう場でみなさんの思いを聞くことを大事にしていきたいです。

〇OBOG 年会費について

理工ボート部に関わるみなさんには、義務感なく、自分なりの形でボートを楽しんで欲しいと、前項でも述べました。適度なゆるさは、理工ボート部にとって大切な要素だと思うからです。

ただ、会費が発生している組織である以上、何もかもを楽観的に考えるべきではないとも思っています。会費のシステムについて、みなさんがどのくらい納得感を持っているのか、不安になることが私にはあります。

下遠野会長が、「自分たちが楽しむためのお金は自分たちで負担する。代を跨いで使用する資産は、代ごとの不公平が出ないように OBOG 会で管理する。」という方向性を示されていました。私もこの考え方がしっくりきています。

私個人の中で、OBOG 会の Vision は[現役部員がボートを楽しみ、充実したサークル生活を送ることができる。] 、 Mission は[現役部員が活動に打ち込むために必要な支援を行う。] だと思っております。この Mission で掲げる支援の 1 つに、設備資産の維持・管理があります。学生がボートに打ち込むために、どのくらいの設備が必要で、それを維持するためにどのくらいの費用が必要かを、お金を払ってくれている方々が共有できるようにしていきたいです。

〇最後に

自分の胸の内を文章で表すことができたので、季刊誌を書いて良かったと思うことができました。このような場を与えていただき、感謝を申し上げます。

2023 年が、理工ボート部に関わる皆さんにとって素敵な 1 年になることを祈念しております。一緒に楽しんでいきましょう！

以上